

「十字架に即位する、まことの王」

(ルカによる福音書 23:35-43)

教会暦の最後の主日を迎えます。この主日は「王なるキリストの主日」と言われます。「王なるキリスト」の主日は、1925年にローマ・カトリックにて定められたものです。1925年はヒトラー、ムッソリーニ、スターリンが独裁体制を固めていった時代です。そのような世の動きの中で、キリストこそがまことの王なのだ、と望み、今が世の終わりのように思えるけれども、王であるキリストが再び来てくださる喜びの時こそが終わりの時なのだと、祝ったのです。今日の福音では、まことの王の姿が示されています。

三つの十字架の真ん中には主イエス、両脇にはいずれも死刑囚です。片方の囚人は「自分自身と我々を救ってみろ」とののしりつつ、切羽詰まっているため懇願します。しかし、十字架から降りられない男がメシアであるとは信じられず、結局はあざ笑い、バカにし、冒瀆します。さて、もう片側の囚人は、「あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と、言うなれば十字架上の主イエスへ信仰告白します。

人々にしてみれば、無力にも十字架から降りてこないことこそ、主イエスが「メシア」でも、「ユダヤ人の王」でもないことの何よりの証しです。しかし、主イエスは、十字架から降りないのです。なぜなら、主イエスは十字架に即位されたからです。玉座ではなく、十字架に即位された王なるキリストは、この世界でもっとも悲惨で、救いようのない現実を生きる人と共におられる王となられたのです。最低最悪の罪を犯した人間であっても、主イエスは同じ罪人となり、その命を樂園へと招きます。すべての人の幸いを心底願い、もっとも苦しい人間をこそ、自らの命を差し出してまでも救われる王です。これこそがまことの王、王なるキリストです。

十字架上のイエス。わたしたちは、その男をどのように見つめているのでしょうか。十字架から降りられないイエスはメシアではないとみなすのか。反対に、十字架から降りないから主イエスはメシアであり、十字架こそ主イエスがメシアである印であると信じるのか。福音書はわたしたちに、どう十字架を見つめるのかを問うています。

自らの十字架への眼差しを顧みつつ、あらためてまことの王への信仰をあらたにし、新しい暦へ向いましょう。そして備えのときである降臨節、心耕され、まことの王のご降誕を心から喜ぶことができますように。